

昔ながらの風景を取り戻したい

われもこうの会

(長野県軽井沢町)

<http://www.h5.dion.ne.jp/~waremoko/>

空き地に野の花を咲かせよう

浅間山麓に位置し日本有数の避暑地として知られる軽井沢は、広大な森林と草原を有する自然豊かな地。しかし、リゾート開発や宅地開発などによってかつての景観は徐々に姿を変え、貴重な植生も失われつつある。

「昔ながらの風景に戻したい」。平成9年秋、地域の有志5人が集まった。「軽井沢らしさって何だろう」「できることって何だろう」と様々な思いが交わされる中で出た結論が、かつて至る所で見かけた「空き地に咲く野の花」だった。

2つの小さな荒れた空き地を町から借りられることとなったメンバーは、春をめざして活動を始めた。土を耕す作業では近郊のリゾート施設の経営者が機械で掘り起こしたり、苗や種の移植作業では植物園が苗分けの支援をするなど、活動を知った地域の有志も続々と参加。こうして平成10年春、ワレモコウをはじめ、アサマキスゲ、マツムシソウなどの花を咲かせた空き地は「前沢の原っぱ」と名付けられ、「われもこうの会」の活動が本格的にスタートした。

四季によって変わる活動内容

「原っぱ」での活動は、春はセイヨウタンポポやヒメジョオンなどの帰化植物や雑草などの除去、秋には収穫した種の植え付けをし、草刈りをして冬に備えるなど、花の生長に合わせて行っている。活動は月2ペースだが、軽井沢に住む人たちは休日に仕事をもっている人が多いため、必ず平日と休日を組み合わせている。当日の参加者はメンバーを含め5～10名程で、中には親子で参加したり、夏ともなれば別荘で過ごす方もいるなど、遠方からの参加者が多いのも会の特徴。

また、発足2年目から始めているのが、会が分けた苗や種を各自が自宅に持ち帰り、育った苗の半分を会に戻すという方法で、メンバーとして参加できなくても、草花を育てることに興味があれば誰でも協力できる活動となっている。

違った形で参加できる多彩な活動

会のメンバーは現在55名。原っぱや草花を育てる活動には参加できないものの、年2回発行の「会報」づくりや「ホームページ」制作など、特技を活かしたり時間が空いている中で協力す



原っぱで帰化植物やオオバコなどの草むしり

会報「われもこう」



ワレモコウ

特集

持続可能な社会をつくるう!

環境保全のまちづくりと環境教育

去る7月18日、「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」が成立しました。同法律では、「持続可能な社会」をめざすためには、環境保全活動への市民の意欲を高めるとともに、環境教育の充実に努めることとしています。「持続可能な社会」とは「健全で恵み豊かな環境を維持し、環境への負荷の少ない健全な経済の発展を図りながら持続的に発展することができる社会」と表現されています。そこで、今回の特集は、環境保全に関わるボランティアグループと環境教育を推進するNPO法人を取り上げ、その活動内容や仕組みづくりについて紹介します。

るメンバーも多い。会報については、主に社協Vセンターをはじめ、植物園や図書館などで配布しているが、2年前に子ども向けの会報をつくり、小学生全員に配布したこともあり、会の活動だけでなく軽井沢の自然を学ぶ冊子としても役立っている。

一昨年から地域通貨「われも」を開始。これは、会の活動に1時間参加することに「1われも」＝「200円相当」が支払われ、中軽井沢を中心とする約25の協力店で買い物や食事などに利用でき、地域のコミュニケーションや町の活性化につなげていくというもの。

一方で、地域の環境保護グループと連携して勉強会を実施。グループ同士の交流を通して、より専門的な知識を得ることで、会の活動にフィードバックするなど、地域での協働も始まりつつある。



昔ながらの野の花が 何気ない道端に咲くような町にしたい

われもこうの会・代表 猪又裕子さん

軽井沢でペンションを開くことになり、横浜市から来たのが今から20年前のこと。たまたま友人に誘われ会の立ち上げに参加しました。もともと野草に興味があったわけではないのですが、オキナクサを育てている方や自宅のお庭で山野草を育てている方、軽井沢の自然保護活動を行っているグループなど、多くの方々との出会いがあり、次第に野草に関心を抱くようになりました。

私自身がそうであったように、活動を通して気付くのは意外と皆さん野草のことをよく知らない。野草は園芸種とは違い地味な花です。人目に付きにくい。ですから、通りがかりに「今の季節は、綺麗ですね」と地元の方から声をかけていただけるとうれしい。今の季節は、綺麗ですね」と地元の方から声をかけていただけるとうれしい。今の季節は、綺麗ですね」と地元の方から声をかけていただけるとうれしい。

一度工事などで作業した場所を、四季折々、野の花が咲く原っぱに戻すのは難しいのですが、なんとか自然のサイクルで野草が育ってほしいですし、それにはもっと技術的な向上を図る必要があります。現在、会が耕した原っぱは4カ所ですが、ちょっとした所にキキョウやマツムシソウが咲いているような、道行く人が「ああ、懐かしい風景だな」と思ってくれるような場所を増やすのが私の夢。

観光で軽井沢に来られる方は車を利用する機会も多いと思いますが、時には車の窓を開けたり、サイクリングを利用して、何気ない道端に咲く「軽井沢の野の花」を覗いてみてください。

市民と事業所と行政が 協働で環境学習活動を実践

特定非営利
活動法人

子ども環境活動支援協会(LEAF)

(兵庫県西宮市)

<http://www2.ocn.ne.jp/~leaf-j/>

子どもたちの環境教育を地域全体でサポート

六甲山系や北摂山系、干潟や自然海浜が残る甲子園浜や香櫨園浜、夙川や武庫川の緑地など、多くの自然を有する西宮市では、昭和61年から市民を対象に、自然調査や水質調査、水辺の自然を観察する環境学習用教材づくり、環境パネル展や環境セミナーなど、様々な体験学習等を実施してきた。これらの取り組みには、小中学生がクラス単位で参加するなど、環境問題に対して市民の関心を高める一定の効果はあったものの、あくまでも単発的な学習会やイベントだった。

その反省をもとに、より継続性・発展性のある事業として「2001年・地球ウォッチングクラブ・にのみや」(通称:EWC)を平成4年から実施。これは、小学生を主役に、家庭・学校・地域の大人も活動に関わる環境学習活動で、保護者や教員をはじめ、企業や諸団体から延べ140名を超える市民ボランティアが参加し、子どもたちのサポート役を担ってきた。こうした市民主体の機運の高まりは、新たなシステムづくりと企業や諸機関との連携強化の追い風となり、EWC活動を継続して担う機関が必要となってきた。こうした背景の中、平成10年に「子ども環境活動支援協会(LEAF)」が誕生し、市民と事業所と行政の協働による新たなEWC活動システムがスタートした。

家庭・学校・地域をつなぐ 「エコカードとエコスタンプ」

LEAFと西宮市が協働で開発した新たな活動システムは、「エコカード」と「エコスタンプ」を活用した環境学習。

これは、市内の全小学生約24,000名に「エコカード」を配布し、一定数のスタンプが集まると「アースレンジャー」に認定されると



エコカード(上から、高学年用エコカード、中学年用裏面、低学年用)とアースレンジャー認定証(赤と緑)

いうもの。活動対象は、学校での環境や自然に関する学習、緑化クラブなどの活動、地域の子ども会や自治会などの資源回収や美化活動への参加、量販店での環境保全商品の購入やリサイクル活動への協力、公民館等に設置されているエコクイズへの取り組みなど。また、スタンプを押す役目は保護者や教員、子ども会等の地域団体のリーダー、文具店や量販店の店員、環境関連施設や公民館職員など、市内で約1,500名の大人が子どもたちのサポーターとして参加している。

EWC活動のプログラム紹介

多彩な活動の中から、2つのプログラムを紹介する。

1. 「身近な川にすむ生き物と出会う」

授業を利用したPTAによる取り組みで、小学1年生を対象にした自然体験。「川にビニール袋を捨てると海に流れ、やがてウミガメが食べて死んでしまう」など、LEAFスタッフによる環境への分かりやすいレクチャーの後、保護者と子どもと一緒に体験を楽しんだ。また、子どもが発見した生き物についてその場で説明できるよう、あらかじめ保護者に対して川の生物についての講義も行われた。



ホタルの生息地でもある川には、どんな生き物がいたのかな?

2. 「リサイクル企業の現場を見よう」

小学校4年生の「総合的な学習の時間」でのゴミ学習を、LEAF企業会員が支援するプログラム。事前に3グループに分かれ、「古紙回収企業」や「リサイクル企業」などを訪問。リサイクル現場では、自分たちが捨てたゴミがどのように分別され、どんな工程でリサイクルされていくかを学ぶなど、それぞれ3つの現場で環境学習を行った。



古紙回収現場では、再生紙の工程などを学びました



Learning and Ecological Activities Foundation for Children

～子どもたちの未来のために今できること～

子ども環境活動支援協会(LEAF)・代表理事 千頭 聡さん

市民・事業所・行政の協働で発足したLEAFは、子どもたちへの支援を通じてまちづくりをすすめる環境学習活動を展開しています。私たちは日常生活を送るうえで、様々な環境に遭遇しています。特に子どもたちは、家庭・学校・地域の各場面において多様な環境と関わる可能性がある中で、LEAFでは「意識的な環境との出会い」を重要課題として捉え、その思いをエコカードとエコスタンプに託しています。この2つは、子どもたちの「気づき」を「つなぐ」、「学習」と「生活」を結び付ける役目を果たしていますが、最も重要な鍵はサポーターである「大人」たちなのです。エコカードを介して、地域の中で子どもたちに励ましの言葉をかけることで、子どもが育ち、さらには大人も自らの行動を振り返ることによって、地域の環境意識が高まっていくと考えています。

実際、これまでの活動によって保護者が積極的に関わるようになり、市内の半数を超える小学校の授業やPTA活動において、協働で環境学習の企画運営を行ったり、ボーイスカウトが子どものために全市一斉のエコアクション活動を展開するなどの活動へと発展しています。また現在、LEAFには約90社の企業が参加していますが、リサイクル学習として工場見学、エコ文具の貸出など、企業との協働による学習プログラムの取り組みも進んでいます。

折しも今年12月、西宮市では日本初となる「環境学習都市宣言」を行います。LEAFではこれまで同様、地域に根ざした環境学習活動を行うとともに、環境学習都市をめざして市民・事業所・行政の協働で支え合うまちづくりをすすめていきたいと思っています。

「持続可能な社会」の実現へ向けて



「持続可能な社会」についての簡単な概要と、「持続可能な社会」に向けた取り組みを進めるうえで、ボランティアコーディネーターとして留意しておきたい視点について、特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター(JANIC)常務理事の山崎唯司氏にお話を伺いました。ぜひご参考にしてください。

「持続可能な社会」ってなに？

1987年、国連の「環境と開発に関する世界委員会」で初めて提唱され、1992年の国連環境開発会議(地球サミット)において最大のテーマとなったのが、「持続可能な開発(Sustainable Development)」という概念。これは、乱開発や乱獲などその場しのぎの開発ではなく、将来の世代にも環境の恩恵を残そうとする考え方で、日本でいち早く取り組みを始めたのが環境NGOである。

また、時を同じくして提唱されるようになったのが「賢明な利用(Wise Use)」で、「持続可能な社会」は、この2つの考え方をもとにして生まれたと考えられており、地球温暖化や廃棄物問題、身近な自然の減少など、現在の環境問題を解決し、地球上の全ての人たちが未来にわたって健やかに生きることができる社会を意味する。

「持続可能な社会」に向けて取り組む際のポイント

1. 「地球上の全ての人たち」を視点に持つ

全国には様々な分野のV・市民活動グループがそれぞれの想いやミッションをもって活動に取り組んでいるが、その活動エリアは「身近な地域」を対象にしている場合が多い。しかし、環境問題の一つである水資源を例にすると、現在でも地球人口の約5分の1にあたる12億人以上の人がきれいな飲み水を利用できない状況で、これは地球人口の約5分の4に当たる開発途上国の人たちに集中している。近い将来では自分たちの飲み水を確保するために各地で紛争が起きるとさえ言われている。そしてこのような課題の原因・構造には日本を初めとする多くの先進国による資源浪費があげられ、水環境の保全といっても国々によってその課題も活動方法も違ってくる。

福祉、環境、開発協力などそれぞれの分野のV・市民活動グループがそれぞれの地域でそれぞれの活動を展開することは、「役割分担」として必要なことであるが、「持続可能な社会」をめざす中では、常に「地球上の全ての人たちと私たちの関わり」という視点を意識したうえで活動に取り組むことが大切である。

2. 異分野のグループが連携して課題に取り組む

広く世界のNPO・NGO団体を見渡すと、日本では分野ごとにグループが別れている傾向が強く、例えば福祉団体と環境団体が連携して課題に取り組むケースは少ないのが現状である。

しかし、「全ての人たちが健やかに生きる」ためには、それぞれの分野の要素が全て影響しあってくる中で、今後は異分野間のパートナーシップづくりが求められる。

例えば、障害のある方々も参加できる自然観察会の実施などは、福祉施設と自然保護団体を結びつける。お互いのグループがそれぞれの分野の特性を活かしながら共通の課題に取り組み、連携を通して理解しあい、お互いの応援者となる場をつくっていくコーディネートがこれからは求められる。

ボランティアセンターが分野を超えた拠点になってほしい

国際協力NGOセンター(JANIC)常務理事 山崎唯司さん

日本の環境NGOは約4,200団体にもものぼると言われていますが、昔から「花鳥風月」という言葉があるように、日本人はもともと自然を愛し、無意識に環境への配慮をもつ感性を備えていると思います。前ページで紹介されている「われもこうの会」は、決して華やかではないけれど昔ながらの野の花を通して、地域の自然を取り戻す活動をされています。また、未来を担う子どもたちに様々な工夫で環境学習を進めている「EWC活動」は、市民と行政とのパートナーシップによるもので、さらにそのアイデアが全国レベルで普及していると聞きましたが、素晴らしいことだと思います。

Vコーディネーターにお願いしたいのは、こうした取り組みをぜひ自分の地域の中だけではなく、広く社会に向けて紹介し、ノウハウやアイデアを伝え、諸団体との輪をつなげてほしい。こうしたネットワークづくりや情報提供は、全国各地に組織があり、多くの人材や情報が集まる社協Vセンターだからこそ果たせる役割でしょう。一方で、これまではやる気と情熱さえあればある程度のコーディネートができてきましたが、様々な利害関係者をまとめなければならないこれらのコーディネーターには、広く社会を見据えた「豊富な情報」や「マネジメント能力」等が要求されます。

「持続可能な社会」をめざすためにも、全国のVコーディネーターの皆さんにはぜひ、社協Vセンターが分野を超えた地域の拠点となるような取り組みを進めていただきたいと期待しています。

環境活動を応援します！———ここでは、環境活動を行うV・市民活動グループやNGOを支援する主な機関を紹介します。

地球環境パートナーシッププラザ(GEIC)

国連大学と環境省が共同で設置した環境情報センター。環境問題に関する情報提供のほか、実際に環境パートナーシップを図るための情報支援も行っている。

開館時間:10時～19時30分(火～金)、10時～17時(土)

祝日、年末年始、原則毎月第4金曜日は休館

問い合わせ先:東京都渋谷区神宮前5-53-70 UVハウス1階

TEL.03-3407-8107 URL <http://www.geic.or.jp/geic/>

環境パートナーシップオフィス(EPO)

環境省直轄の機関で、市民・企業・行政の3つの異なるセクターで運営。環境パートナーシップの事例紹介やセクター間の関係づくりなど、環境パートナーシップを図ることを推進するプロジェクトチーム。

開館時間:10時～21時(火～金)、10時～17時(土)

問い合わせ先:東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山地下2階

TEL.03-3406-5180 URL <http://www.geic.or.jp/epo/>

特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター(JANIC)

日本国内で国際協力やNGOに関して専門的に広報したり、NGOがより活動しやすい社会づくりを推進する拠点機関。センター内に「NGO市民情報センター」を設置し、市民向けにNGOに関する書籍やイベント・セミナーなどの情報提供も行っている。

開館時間:NGO市民情報センター

13時～17時(火・土)、13時～20時(水・木)

問い合わせ先:東京都千代田区神田錦町2-9-1 斉藤ビル2階

TEL.03-3294-5370 URL <http://www.janic.org/>